

# 「ぼくのおにいちゃん」

齋藤 悠星

ぼくのひだりのほっぺには、おにいちゃんにわざとひっかかれてできたきずがあります。もうほんとにもたつのに、きずがきえません。このときのことを、おもいだすと、すごくおこりたいきもちだけど、きょうは、そのぼくのおにいちゃんに、ありがとうをいいたいとおもいます。

4がつに、にゅうがくしてはじめてあめのなか、とうこうずるひがありました。かさをさしてあるいたことは、なんどもあるけど、かさをじぶんでたんだことがありませんでした。がつこうについて、なかなかうまくたためなくてこまっていたと、おにいちゃんがなにもいわず、ぼくのかさをすこしらえようと、おにいちゃんにたんでくれました。

いつもけんかばかりしているから、ぼくのがきらいなんだとずっとおもっていました。でも、このひからおにいちゃんは、いえだとぼくにきびしいけど、そとにでるとみかたになつてくれるひとなんだとおもいました。

そういえば、おにいちゃんのおかげで、ぼくにも、おおきいともだちがたくさんいるししゅくだいがわからないともんくをいいながらだけど、おしえてくれるなときづきました。にゅうがくしたばかりのときに、あまりドキドキしなかったのも、おなじばしょにおにいちゃんがいてくれたからでした。

ぼくは、おにいちゃんのまねをしていけばなんとかなることうがおおいけど、おにいちゃんは、なにかをはじめるとき、きょうだいでいつもさいしょなのに、ちゃんとしていてかっこいいなとおもいます。

これから、もしぼくがおにいちゃんのためにできることがあったとしたら、いつものおんがえしがしたいです。はずかしいから、こえにだしてはいえないけれど、こころのなかで、ぼくのおにいちゃんにいてくれてありがとうといいたいです。